

『時事通信 内外教育版』 936号 一九五八年五月二三日 (時事通信社)



勤務評定

矢口 新 (国立教育研究所員)

○最近英語の論文を書く機会が時折ある。ところが私ごとき者の英語の力では到底まっとうなものを書けないので、専門の翻訳者に頼むことにした。その翻訳者の一人に、アメリカの占領時代にアチラさんの翻訳局にいた人がある。日本の新聞の論説を翻訳して提出する仕事をしたのだそうである。その仕事の仕方というか、させ方が、まことにすさまじいので紹介したい。毎日翻訳して提出すると、その上にいる人が校閲して、朱を入れて返してくれるのだそうである。そして、A、B、C、Dという階級を表わす点がついている。Dばかりもらっていると減俸だそうである。「まったくやり切れませんでしたよ」とその人はいまでも述懐している。「しかし勉強になりましたよ」といつている。確かにその人の翻訳を見ているとまったく驚くほど早く、しかも適切である。そういう力は恐ら

くアメリカさんに仕込まれたものであろう。つまり毎日勤務評定を受けていたわけである。しかし同時に教育も受けていたから力も伸びた。この勤務評定をする人は、大変な語学力の持ち主で、日本人より日本語ができた人だったそうである。

○この話は私にはおもしろかった。アメリカ流のきびしいところはあるが、勤務評定の考え方は実にはつきりしている。日本の教師が最近問題にしている勤務評定の問題も、こんなふうにはいかないものだろうか。というのは、このアメリカ式のやり方の根底には、教育という考え方があるのである。ただ形式的に評定して、記録をつくるということでない。その教育活動の結果、ひとりでに評定が生まれるのである。考え方が根本的にちがっているようである。

○日本では、学校の校長さんともなると、そ

とまわりが多くなって、いろいろな人のご機嫌を取り結ぶのが仕事になるそうである。新しい教育のことはよくわからないなどという人が多いような気がする。翻訳にいちいち手を入れて返してくれるように、校長さんが教員を指導するようになったら、必然的に勤務評定は生まれて来るのではないだろうか。勤務評定ということは、評定用紙に適当に記入することだというような考え方が横行していて、しかもこんな大さわぎをしているのは、ドッチもドッチで、少しいかれていてのではないだろうか。

○私は相撲や野球は大好きだが、あれば自然に勤務評定がされるようにできている。だれかが頭の中で、どう評定しようかなどひねくられなくても星取表や、打率や毎日の働きの結果から自然に出て来る。それは単純だからそうできるのだと考えてはいけない。毎日毎日の教育活動が校長によって見られ、指導されているなら、その結果を自然にまとめることを考えたらいいのである。そういうことがなくて、頭でひねり出すのなら、なくてもよいし、記録に残すほどのものでない。評定をする方もされる方も、教育者が真剣に仕事をして、のびてゆくという本道をさがしたらどうか。